

老子の実存

二・三の近代実存者に触れながら

小 島 哲 雄

わたしはうまやから馬を引いてくるようにと命じた。下男は私のいうことがわからなかったらしい。私は自分でうまやへ行つて、馬に鞍をおくとそれにまたがった。遠くでラッパの音が聞こえた。なんだろう、とわたしはたずねた。下男は知らなかった。彼には聞えなかったのだ。門のところで、下男はわたしをとめてたずねた。「どちらへいらっしゃるのですか。」「知らない。」「わたしはいった。「ここを去るだけだ。ここを出て行くのだ。どこまでも去るのだ。そうしなければ、わたしは目標に到達できないのだ。」「それでは、行先がおりなざるのですね。」「と下男がたずねた。「そうとも」と、わたしは答えた。「いま言ったではないか、ここから去ること——それがわたしの目標だ。」「(フランツ・カフカ「出発」前田敬作訳)

紀元前五世紀、老子は既にキェルケゴールであった。素朴な意味で、当然のこととして。なぜなら人類が何千年の歴史を重ねるにせ

よ、抽象化され得ないものとして個々人は存在するからである。キェルケゴールが徹底してヘーゲル批判の上に実存哲学を展開したと同様、老子は孔子批判・儒教批判の上に実存を主張しつづけたといえる。ヘーゲルが全ての表象を概念に置き換え、人間もまた概念として、命を剝奪され形骸化存在となってしまうとき、哲学とは人間にとつていったい何なのか。孔子が孝や智、仁や礼を唱えるとき、既に個々人は抹殺されているのではないか。老子は謂う。「大道廢れて仁義あり、知恵出でて、大偽あり、六親和せずして、孝慈あり、國家昏乱して、忠臣あり」と。孔子はあくまで人間を信じ、ことばと人知に夢を見、価値を与えた。それはしかし、老子にとってはナセンスの浜辺に打ち上げられたもののように滑稽であった。また謂う「信言は美ならず、美言は信ならず、善き者は弁せず、弁するものは善からず……」「知る者は言わず、言うものは知らず……」「学を絶てば憂いなし、唯と阿と相去ること幾何ぞ、善と惡と相去ることいかに……」「学ばざるを学び……」「不言の教を行ふ……」

孔子はことばにより知を構築し、知により学を成していくわけであるが、老子にとってはその言も知も学も、畢竟同じ意味しかもたない。それらはすなわち、識別であり、区別であり、概念化以外の何でもない故に。そういう抽象化思弁化哲学の空しさを、キエルケゴールはヘーゲルを頭におきながらいう、「ある思想家が巨大な殿堂を建てたとする。すなわち全宇宙をも世界歴史をも包含する思想体系を建てたとする。ところでこの人の個人生活を見るに、驚いたことには、彼自身はこの巨大な円天井のついた御殿には住んでいないで、犬小屋とか附属の小使部屋とか、あるいはせいぜい門番部屋ぐらゐなところに住んでいるという怖るべくもまた笑うべき事実があらわれてくる。」更に呼応するようにドストエフスキーは謂う。

「人間は不可能にぶつかるとすぐにあきらめてしまうのがつねである。不可能——それは石の壁ということだ。石の壁とは何か？それは自然の法則であり自然科学の法則である。それはつまり数学である。君たち人間は猿から進化したのだという証明を見せられたら、しかめっ面をしたってはいまならない。なるほど、さようで、といってひきさがってくるほかはない。それが数学なのである。うっかり口答えでもしようものなら、何をいうか、と逆ねじを食わされるにきまっている。口答えは無用だ、それは二・二が四ということだ。自然は君にものをたずねてなんかはいしない。自然は君の望みなんぞ取り合わないし、法則が君のお気に召そうと召すまいと、自然の知ったことではない。君はただ自然をありのままに受けいれねばな

らぬ。したがって、その結果をも、すべてありがたく頂戴すべきである。壁はすなわち壁である。」しかしそのような思弁的論理的必然性になぜ人間が隸属しなければならぬか、理由はどこにもない。このようにして人間は数、あるいは番号にまで墮落させられていくのである。しかし彼はそれを肯じ得ない。断固として拒否するのである。「道の道とすべきは常道に非ず、名の名とすべきは常名に非ず……」老子もまた断固として拒否する。老子にとって人間存在は決して抽象化されたり、概念化され得る存在ではない。ましてや抽象化された忠や孝、仁や礼、更には知に自己の存在を売り渡し、自己を喪失あるいは忘却することは、自己疎外の意味しかもたないのである。

キエルケゴールの信仰も、ドストエフスキーのいう「石の壁」に向かつての絶望的冒険であった。その冒険——壁の外に出ること、それは文字通りエグジステンツなのだが——を拒否するということは、即ち無差別的な必然性のうちへの埋没ないしは、自己を単なる数に墮落させてしまうことに他ならない。その意味で実存者は決して魂を誰にも売り渡すことがない。従って常に単独者あるいは孤独者の面貌しか持たないのである。しかしこのような単独者にとって何が可能であろうか。単独者が自己にかかわるうとするとき、自己の足下に限りない虚無の深淵をみ、投げ出された自己をみ、その限りにおいて、法もなく、指標もなく、偏見もありえようはずがない正にゼロ地点に自己を置き、自己を投げかけねばならず、自己が

めざす自己をたえずやむことなく創造していかねばならぬ。ヤスパースの「人間であることは人間となることである」はこのことである。この限りにおいて、魂は自由である。自由であるが故に恍惚とし恐怖し苦悩する。更に絶望し、救いをもとめ、あるいは、永久に絶望しつづける。

キェルケゴールは実存者を投げ出した他者として、神を置くが、その神はもはやニーチェをして「神は死んだ」といわせた神でなく、その手から人間を解放し、（あるいは突き落とし）その人間が自己を得るか失うかをすべて個人の責任において引き受けさせる。その意味において、人間は有限なるものと、無限なるもの、また時間と永遠、必然と可能性の接点に位置する。あるいはその両者を自己の内に引き受けているのである。

「道」と老子がいうとき、それはまた人間を放った神である。その前には孤独者としてこれに対峙しなければならなかった。否、むしろ老子が老子自身にかかわるとき、自己の卑小と同時に「道」の永遠や可能が彼の體に直覺されたといっている。自己の中に道があり、道の中に自己がある。そのような直覺はどこから由って来たのであるうか。

老子二章に謂う、「是を以って聖人無為の事に居り、不言の教えを行う、万物作れども始とせず、生じて有せず、為して恃まず、功成りて居らず、是を以って去らず」同十九章「聖を絶ち智を棄つれば民利百倍、仁を絶ち、義を棄つれば、民孝慈に復る……中略……

素を見、撲を抱いて、私少なく欲寡し」この二つの章に限らず全八十一章のほぼ半分を同趣旨の文に割いているといってもよい。人間がすべての虚飾を取り去り、自己に復り、——ということは自己の実存を自覚すれば、自己が見え、更に自己とかわかることによって自己を投げかけたものを直覺することが可能となるのである。したがって道は神と同様客観的に冷ややかに抽象として、あるいは論理的必然として認識されるものでなく、主体的全人格的に直覺され得べきものとなる。老子はよく赤子の主客未分なる状態を全人格的ということばの代用とした。老子二章に謂う「聖人無為の事に居り」とは人間の作為、偽瞞、魂の売り渡し、虚飾を一切断つということであり、「不言の教えを行う」とは言語化され得ない教え——つまり虚無の果てに捉え得た呼び声に応じることをさし、更に「万物作れども始とせず、生じて有せず、為して恃まず、功成りて居らず、是を以って去らず」はゼロ地点から自己をたえまなく投企し、常に主体的存在者実存者として虚無の外に自己を投げかけていく絶望的創造的努力をさし、その努力と自己に責任をもつ投企とは終わることがない、したがって自己が自己を去ることはなくなってしまう。

以上の如く道や神は思弁の果てに客観的普遍的存在としてあらわれ得べきものでなく、人間が単独者として生きたとき、そのうちなる絶対者としてあらわれてくるのである。もう一度くり返せば、何よりもまず、人間は個別者として現実存在として生きているという自覚——その限りにおいて自己に全責任を負い、自己の、単なる記号

化を拒否する生き方——それが実存だといえる。

しかし、現実において実存することが意味するものは何か、中国の古代においてもヨーロッパ近代においても、樂觀的な論理的必然を推進する思弁哲学が大勢を占め、またどの時代においても、実存者は例外者として無視されつづけた。時代の危機即ち人間が極端な不安に追いやられた時代には、わずかにかえりみられることはあったが……。そして現代、人間はほぼ完全に概念化され、更にあらゆる意味において疎外化されつづける。この時代に至ってようやく、実存哲学は最後の哲学として浮かびあがってきたのである。したがって実存者を特徴づけてきたのは、陰鬱なる孤独者の顔であり多分に醜怪であった。

たとえば、『変身』の中でグレゴール・ザムザは自己を一匹の醜い巨大な虫として自覚せねばならなかったし、老子二十章は次のように語る。「学を絶てば憂いなし。唯と阿と相去ること幾何ぞや、善と惡と相去ること如何ぞ、人の畏るる所は畏れざるべからず、荒として其れ未だ央ぎざるか、衆人は熙々として太宰を享くるが如く、春台に登るが如し、我は独り泊として其れ未だ兆さず、嬰兒の未だ孩わざるが如く乗々として帰する所なきが如し、衆人は皆餘りありて、我は独り遺れたるが如し、我は愚人の心なるかな、沌々たり、俗人は昭々たり、我は独り昏きが如し、俗人は察々たり、我は一人悶々たり、澹々として其れ海の如く、颺として止まることなきが如し、衆人は皆以ってすることあり、我は独り頑にして鄙に似たり、

我は独り人に異りて、母に食われんことを貴ぶ。」と沈黙し、ふさぎ、愚人の如くさまよう老子の面影躍如たるものがある。そしてその沈黙は「かくして神は沈黙を愛したもう（神との関係に関する沈黙は強化剤であり、絶対的な沈黙は挺子のようなものである。あるいはアルキメデスの言う世界の外にある一点のようなものである。神との関係に関して語るということは、人を弱める消耗である。）神は人間が神との関係についておしゃべりすることは好まれない、そういうおしゃべりはおそらく虚栄であろう。——それは神の氣に入らないのである。虚栄でなければ、それは臆病であり、信仰の欠如である。なぜなら、そのとき人は神に身を委ねていないのだからである。」というキエルケゴールの言とも符合を見るのである。また日本の実存者として知られる道元の謂いもこれを補うであろう。「それ修証はひとつにあらずとおもえる、すなわち外道の見なり。仏法には修証これ一平等なり。いまも証上の修なるゆえに、初心の弁道すなわち本証の全体なり。かかるがゆえに、修行の用心をささずるにも、修のほかに証をまつおもしなかれとおしう。」修はそのまま証（悟り）だということである。したがって修を修とすること、即ち、修のほかに証を待つことを——キエルケゴール流に言えば、神に関して語ること、神を横（あるいは傍）からながめることをいまいしめているのである。

ともあれ、老子の思想と重ね合わせることでできる実存者は他に何人か指摘できるはずであるが、むしろ、老子の思想そのものが

さまざまな側面を持ち——老子複数の故か——一挙に捉え難く、ここではその実存的側面に焦点を絞ったつもりである。

(土佐高等学校教諭)

第一回目の決意の反省

① 自分の ヒューマニティ に驚く

決定的瞬間に敵を撃つまいと思ったこと

(私の戦場訓)——スタンダールの一人物を引用——
自分の生命がその手にある以上、その人を殺す権利がある

②

(命題) 殺されるよりは……殺す……(シニスム)——

無意識に進行した理論

③

(判断) 死ぬから……殺さない(必然性なし)

←命題の検討

④

死ぬから……④殺す
死ぬから……⑤殺さない

「殺されるよりは」という前提がくつがえった
ときすぐ「殺さない」を選んだ

……(シニクでなかった)

——シニスムの放棄——

⑤ 絶体的要請にぶつかる

⑥ 人類愛

⑦ ⑧ 人間の血に対する嫌悪を伴った感覚

——動物的反応——

⑩ 問題……実現したか・しなかったか

図 IV (34ページ参照)